



救急医療部から
～この2年間を振り返って～

救急医療部 部長
目黒 順 一

救急医療部を担当して早くも今期の2年間が過ぎようとしている。今回、特集を組むとのことで原稿の執筆依頼があった。この間の思いを自由に書けとご指示に従い、思いのままに書いてみることにした。

救急医療は医療の原点と言われて久しいが、道内を始め全国の多くの地域で、救急医療体制の構築・維持に多大な苦勞が払われているのは周知の通りである。原因は各地域の特性によりさまざまであろうが、多くの共通点は医師不足または、医師の診療科偏在と地域偏在であろう。これを解決することは容易ではない。救急を担う医師(科を問わず)の養成も時間がかかるし、必ずしも医師不足の地域に定住する訳ではない。診療科偏在と地域偏在は、強制的な方法なしにはおそらく困難であろう。となると、次善の策として医療機関の連携と搬送システムの整備が考えられる。すなわち、交通網の整備や航空医療体制の整備であり、医療機関の連携については、今まさに策定が義務付けられている地域医療構想が肝になる。

一方、これまでのメディカルコントロール体制は、救急救命士の業務の保証としてのみ機能してきたが、今や、地域包括ケアの中の大きな一要素として位置付けられるようになってきた。つまり、在宅や各種施設での生活者を、救急の観点からどのようにケアするのか、具体的には、かかりつけ医で良いのか、二次医療機関か、三次医療機関かの判断が求められる。つまり、これらすべてを包括するシステムがメディカルコントロール体制と見なされるようになった。こうなると救急医療部の枠からはみ出さざるを得ない事態になりつつある。他の関連部との連携が求められると考えている。

さて、以上を踏まえてこの2年間に行った事業を振り返ってみたい。

まず、始めてから10年が経過した小児救急医療地域研修会がある。これは小児科医の偏在に伴う問題の解決の一助となるべく行われている事業であるが、牛歩の歩みながら、着実に成果を挙げていると自負したい。しかし、北海道小児科医会の諸先生の多大なるご協力には、頭が上がらないのである。今後、いろいろなバージョンアップを模索したい。

次に、災害医療対策を挙げたい。しかし、災害対策マニュアルを策定したいという永年の望みはいまだに実現できずにいる。忸怩たる思いである。他県の

実例を参考に、北海道の実情にあった物を作りたいものである。それでも、東日本大震災から学んだ経験をもとに、北海道独自のJMAT研修会を行っているが、参加者のモチベーションの高さに圧倒される思いである。医療人の人助けの志を側面からサポートしたいと思う。こちらも、救急専門医の諸先生の指導下に、さらなるバージョンアップを企画したい。

最後に、航空医療体制について述べる。ご承知の通り国土面積の22%を占める北海道では、先に述べたように搬送体制の構築が非常に重要となる。とりわけ航空搬送体制の確立は古くから求められてきたが、道内では試験運航の末に2005年4月1日から、道央圏に北海道初のドクターヘリが正式に導入された。これに引き続き、2009年10月から道東と道北に相次いで導入され、3機体制となった。その後、残された道南圏と十勝圏への導入が模索され、2015年2月16日に道南ドクターヘリが運航を開始した。残る空白地域は十勝圏であるが、当面は他の圏域ヘリの運航圏拡大で対応することになった。しかし、当該地域住民のためには、いずれ導入すべきと考えているので、引き続き検討したい。

さらに、広大な北海道においては医療資源の偏在も明らかであり、地域によっては高度医療が受けられない地域も多い。これを平準化する手段として、固定翼機を用いた搬送システムの構築が求められる。われわれは北海道航空医療ネットワーク研究会(HAMN)に参加し、小型ジェット機等の固定翼機による患者搬送等の試験運航を実施したが、その効果は明らかであり、道内はもとより、道外の医療機関との連携も可能であった。内容は昨年出版された報告書にゆずるが、本格運航に向けた運動を今後も継続したい。マスコミを通じた道民への啓発、各種学会での発表、各種医学雑誌への論文投稿など、地道な努力も行っているが、さらには政治家や厚生労働省への積極的な働き掛けも行ってゆく所存である。実際、高橋はるみ北海道知事は、今年の北海道医師会新年交礼会の来賓挨拶において、多数の参加者を前に、固定翼機の本格運航を実現する旨の発言をして下さった。さらに、本年3月15日の代議員会での来賓挨拶でも同様の発言を代議員各位の前で述べられた。また、北海道知事選挙において、4選を目指す選挙公約の中に、はっきりと固定翼機の導入を謳って下さった。道内では与野党を問わず、導入に前向きな議員が多いので、この追い風に乗って、一気に本格運航を実現し、救急医療体制の一層の充実を図りたいと思う。

救急医療部の仕事は範囲が広範に亘るため、課題も多いが、課題が解決した時の効果も大きいので、今後とも会員諸兄のご協力を得て諸問題の解決・改善に真摯に取り組みたいと思う。